

## 序章 福田恆存と「保守」

### I 戦後史における福田恆存評価——一九八〇年代まで

その活動と影響の広さにおいて戦後特異な存在であった福田恆存（一九二二—一九九四年）は、しかし、長く毀誉褒貶に曝され続けており、いまだに安定的な評価が確立されているとは言えない。戦後直後に文芸批評家として登場し、次第に小説家、脚本家、シエイクスピア翻訳者として活躍しながら、後に自ら財団法人現代演劇協会およびその付属劇団である「雲」や「櫻」（後に「昴」に統合）を立ち上げ、三百人劇場を拠点として演劇活動に邁進していった福田恆存は、しかし一方で、保守論壇人としても幾多の文学・政治論争（「政治と文学」論争、チャタレイ裁判、国民文学論争、「平和論」論争、国語国字論争、安保闘争批判、ラッセル批判、ベトナム戦争反対運動批判、防衛論争など）を繰り広げており、そのどこを切り取るかで表情を様々に変化させる。つまり、批評家、演劇家、翻訳者などの顔を持ちながら戦後最大の保守派論客としても注目を集めてきたという福田の履歴は、その統一した全体像を容易に描かせず、その評価をも極端に分けてしまうという性格を孕み続けてきたのだ。

たとえば、昭和三十五年（一九六〇）前後から次第に書かれるようになった福田恆存論において

も、評価の揺らぎはうかがえる。「現代人の自省、あるいは自虐とも言うべき彼自身の内面の劇が、いつの場合にもそのモチーフになっていることで、これを彼ほど徹底的に容赦なく遂行したひとは我国にはいないのです」(中村光夫、一九五七年四月)<sup>②</sup>という評言、また「戦後の日本の思想界において福田恆存ほど大きなセンセーションを引き起こし、しかもその活動の効果が大きかった人は他にない」(林健太郎、一九六三年十二月)<sup>③</sup>という評価、そして「戦後の(と限らなくてもいいが)わが国の文化思想界で、社会科学者も含めて、福田恆存氏ほど、その思想と行動においてロジカルに一貫した生き方をしてきた人はいないのではないか」(中村雄二郎、一九六五年一月)<sup>④</sup>などという最大限の讃辞を受けながら、しかし他方では、「危険な思想家」(山田宗睦、一九六五年三月)<sup>⑤</sup>、「体制イデオログの先兵的役割」を担った「反動のそれ」(矢留一太郎、一九六五年十一月)<sup>⑥</sup>、「全体主義哲学と表裏一体をなしている」(「国家ナシヨナリズムの果敢な擁護者」(檜山久雄、一九六六年五月)<sup>⑦</sup>、「ナシヨナルインタレストを露骨におしだして、平和主義と国際主義を批判した先駆者」(安丸良夫、一九七二年三月)<sup>⑧</sup>、「デマゴグ的な道化役者」(いいだもも、一九七八年十二月)<sup>⑩</sup>といった罵倒的な批判も福田は浴び続けてきたのである。ただし、それら極端に分裂した評価の反面、一部では、福田恆存の言葉がイデオロギー党派の枠組みを超えて受容されていた事実には注意したい。

例えば、自身全共闘運動に関わっていた桂秀実が、「戦後民主主義批判」を媒介にして、「福田がブントに影響を及ぼした部分では、実はある」(一九八五年六月)<sup>⑪</sup>と語り、また、蓮実重彦が「彼はむしろ左翼に影響があったと思う。事実、昭和二十年代には、左翼が福田恆存を読んでいたじゃないか」(一九九〇年一月)<sup>⑫</sup>と語るなど、特に八〇年代以降、福田の(新)左翼への影響を指摘する評言が頻出するようになる。そして、それらの発言を裏付けるように、学生当時、「共産主義者同盟」(通称

ブント・全学連主流派)に所属していた柄谷行人は、「私が英文学をやるうという気をおこしたのは、英文学畑の三人の批評家、福田恆存、江藤淳、吉田健一の影響だったのである」(一九七七年九月)<sup>13</sup>と述べ、「私が福田恆存を最初に読んだのは一九六〇年の秋であったが、自分と政治的立場が違うにもかかわらず、何の違和感も覚えなかった」(一九九五年二月)<sup>14</sup>と語っているのである。その他、福田恆存から吉本隆明「マチウ書試論」などへの影響の指摘(呉智英、磯田光一、三浦雅士による)、福田恆存と花田清輝との類似性の指摘(粕谷一希、磯田光一)、また「あの人は戦争中わりにリベラルに生きて、そのことで逆に戦後は左翼嫌いになるんです」(一九九三年)<sup>17</sup>といった森毅による感想、そして「福田恆存は、その頃〔戦前〕は左翼にかなり近かったわけですね。(浅田彰)／アメリカのニューディール左派と同様、近かった。(久野収)」(一九九五年一月)といった同時代者からの評言にくわえ、福田の初期評論集『平衡感覚』(一九四七年十二月)が、「花田清輝を参謀とする前衛派の根拠地」(四・二八二)である真善美社という出版社から出されていた事実そして六〇年安保闘争後に全学連の幹部であった島成郎や唐牛健太郎が福田恆存と会っている点<sup>19</sup>までを確認すれば、福田恆存の批評的影響力が、現在一般的に流通している「戦後最大の保守派の論客」といったクリシエでは到底覆い尽くせない領域にまで及んでいたことが見えてくるだろう。

そして、おそらく、そのようなイデオロギー的裁断では見えてこない福田恆存の思想が、初めて真剣な検討課題として浮上したのが、一九八〇年代後半にさしかかって発表されはじめた一連の福田恆存論においてだった。まず、注目すべきなのは、自身、元全学連駒場委員長として六〇年安保闘争を戦い、後に、アカデミックな経済学者から本格的な保守思想家に転じて批評活動を展開した西部邁の「保守思想の神髄——福田恆存」(一九八五年四月)<sup>20</sup>である。「保守的精神の世界における単独者で

ありつづけてきた」福田恆存を、その「単独」性において「戦後の風潮」から切り離して評価した西部の論は、福田の「保守」性を、思想それ自体の相において検討する地平を拓いたと言える。それ以降、『福田恆存全集』全八巻（文藝春秋、一九八七年一月―八八年七月）の刊行開始に歩みを合わせるように、富岡幸一郎「近代の超克」とポスト・モダン——福田恆存と現在」（一九八八年一月）<sup>21</sup>や、井尻千男「福田恆存を読む」（一九八九年一月―十二月連載）<sup>22</sup>、そして、土屋道雄『福田恆存と戦後の時代——保守の精神とは何か』（日本教文社、一九八九年八月）などの新鮮な福田恆存論が立て続けに現われたのだった。むしろ、その背景には、冷戦の雪解けムードのなか、高度成長を終えて消費社会を迎えつつあった日本において、ポスト・モダンニズムの流行とともに、イデオロギー規定的な言説（マルクス主義、進歩主義、近代主義）が次第に後退するといった時代の後押しがあつたことも確かである。実際、以上の論文において福田は、一九八〇年代以降顕在化してくる「戦後ヒューマニズムへの根本懐疑」（井尻千男）や、「西欧近代を支えてきた（モダン）の価値への不信心」（富岡幸一郎）を、時代を先取って「既に明快に表現し切っていた」（西部邁）学ぶべき先覚者として呼び出されていたのだった。

しかし、それらの福田論とは別に、時代の情勢変化に即して発せられた言葉を最も信じていなかったのも福田恆存自身だったことには注意したい。八〇年代を迎え、日本の言論界が「保守化」したと言われはじめた丁度その頃、福田は次のように書いていた。

「世の中は随分變つて來ましたね、二十五、六年前、あなたが平和論の迷妄を批判した時と較べて……。」近頃よくさう言はれる、勿論、相手は平和論批判以來の私の仕事の仕事がその變化に多少

の役割を演じた「功」を稿ねがつてくれるのである。さう言つてくれる好意はありがたいが、その「功」を私自身は一度も認めることが無い。なるほど平和論批判の時、私の爲に援護射撃してくれる人は殆ど無く、私は村八分にされた、その頃に較べれば確かに世の中は變り、私の様な考へ方は「常識」になつたとさへ言へる。寧ろ左翼的な「進歩的文化人」の言論の方が村八分にされかねない世の中になつた。そして私は二十數年前と同様、厭な世の中だなど懽然としてゐる、その意味では、世の中は少しも變つてゐはしない。

私の平和論批判や安保騒動批判が正しかつたから、その論理の正しさによつて世の中が變つたのではない、世の中が變つたので、私の考へ方が正しかつたといふ事になつただけの話である。

〔言論の空しさ〕『諸君！』一九八〇年六月、全七・五七九

そして、現在を「二十數年前と同様、厭な世の中」だと断じる福田は、一九八〇年代以降、今度、身内であるはずの保守派の批判へと赴くのである。たとえ、それが当時の賛意どころか真剣な反論さえ呼べず、「奇妙な感じ」(渡部昇一)<sup>(23)</sup>を伴つて、福田恆存の「感情的反発」(谷沢永一)、「論理の揚げ足取り」(百目鬼恭三郎)程度に受け流されたのだとしても、しかし、福田は、自身への評価が高まりつつあつたその時、かつての「進歩的知識人」を批判するように「保守派知識人」を批判し始めるのである。福田はいう、「私は小利口な要領のいい人間は嫌ひである。私は何々派だの何々主義者だのであつたことは一度もない。私は何を書いても、ただ人間について、常識的に論じてゐるだけである。小説でも評論でも、人間が人間について人間らしく論じてゐるのでなければ、保守的現実主義者と革新的理想主義者の別はない、私としてはそれらを「斬ら」ざるを得なかつたまでのことであ

る」と。<sup>(26)</sup>

では、久しく福田恆存の代名詞となり、また福田恆存自身が主題的に語ったこともある「保守」とは一体何だったのか。戦後長い間、党派の裁断に晒されながら、しかし「新左翼」の思考にさえ微妙な影響を及ぼすといった福田の「常識」とは一体どのような構造を持っていたのか。そして、福田恆存の「人間」観は、なぜ八〇年代に台頭してきた保守派を拒まなければならなかったのか。むろん、それらの詳細は、本書全体を通して論じられることになる。しかし、イデオロギー党派の擁護・宣伝ではなく、福田恆存の思考の全体像を整合的に描き出すことを目的としている本書において、その導入部にあたる序章では、これまで戦後思想の手垢にまみれ、時に一人歩きさせてきた〈福田恆存Ⅱ保守派〉というイメージをひとまずは疑い、その先で、福田恆存の思想を、思想それ自体の相で問うための入口を示したいと考えている。

したがって、序章では、第一章から第三章の本論で展開される時系列に沿った記述とは異なり、福田恆存の「国家」観、または「政治」観というモチーフに焦点を絞って論を進めていきたい。具体的には、福田の思考に内在してその履歴を追跡するのではなく、特に一九七〇年代以降の福田の言葉（第一章―第三章では特に主題化していない）を中心に、同じ保守派であった江藤淳や三島由紀夫、また後に保守派に転じた清水幾太郎との差異を通じて、福田自身の〈政治Ⅱ国家〉観の外堀を埋め、そこから逆に、その政治的主張を突き動かしていた福田の思考、言いかえれば、政治的主張の手前にこそあった福田の内在的な論理を問うための準備を整えたいと考えている。また、本書の課題・方法・構成については序章最終節で述べることにする。